

中世墳墓に伴う建物

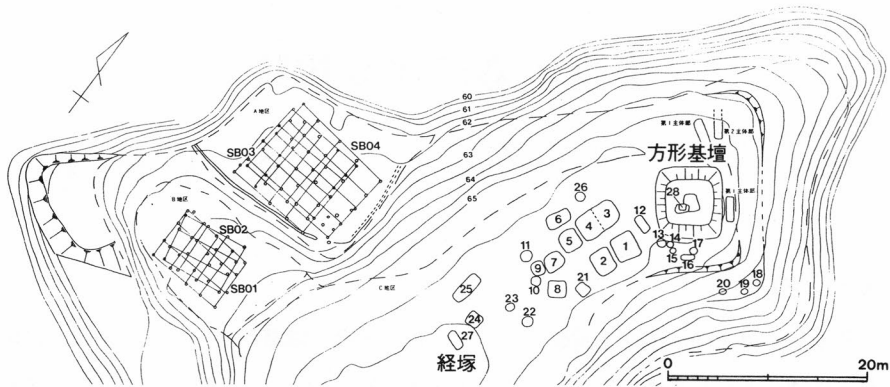
森 島 康 雄

1 はじめに

1983年1月、第13回埋蔵文化財研究会が「古代・中世の墳墓について」をテーマに開催された。当時、まだ教養課程の学生であった筆者は知る由もないが、資料集の編集等を担当した当センターは設立後満2年を迎えようとしていた。当センター設立前後には、京都府内において重要な中世墳墓の調査がつぎつぎに行われており、¹京都で開催される埋蔵文化財研究会のテーマに「古代・中世の墳墓について」が選ばれた背景にも、こうした事情があったのではないかと想像される。その後、各遺跡の報告書も刊行されたが、それらを総合的に扱った論考は未だ行われなままである。小稿は、中世墳墓の構造を理解する一側面として、特に、中世墳墓に伴う建物に注目して、京都府北部の事例を中心に研究ノートのまとめを試みたものである。

2 資 料

大道廃寺跡²は福知山市大字今安小字大道に所在する。古墓は北に向かったのびる狭長な尾根上に分布し、27基が検出されている。マウンドを持つものと持たないもの、蔵骨器を持つものと持たないものなど、外部施設、埋葬主体部に差異はあるが、いずれも火葬墓と考えられる。これらの古墓は、出土遺物からみて13世紀前半～14世紀いっぱいにはわたって営まれたものと考えられる。また、古墓群の北端(尾根上の平坦部の先端)には方形基壇1基が、南端には経塚1基が営まれている。方形基壇は一辺約8m、高さ約0.6mを測り、基壇上面で土坑が検出されている。この土坑は深さ10cm足らずしか残っておらず、上部は削平されたものと思われる。土坑内からは、多量の人骨とともに、土師器鍋と東播系須恵器鉢の破片が検出されているので、本来は、基壇上に納骨塔及びその覆い屋が設けられた納骨の場であったものと思われる。この方形基壇については、藤澤典彦氏が墓地の総供養塔的な性格のものとする見解を示している。氏はまた、³総供養塔は基本的に納骨塔であったとも述べており、本遺構は、その実例ということができるであろう。造営の時期は14世紀中葉頃であり、この古墓群が営まれなくなる14世紀後葉まで納骨が行われたものであろう。経塚は、須恵器甕と須恵器鉢を合せ口にした外容器に、銅製経筒1口と竹製経筒2



第1図 大道廃寺平面図

口が納められていた。銅製経筒内には、「妙法蓮華経」8巻と「阿弥陀経」1巻が遺存していた。供献遺物には、土師器皿5枚、桧扇、菊花双鳥鏡、景祐元宝2枚などがある。この経塚は外容器から13世紀初頭の造営と考えられ、古墓群に先行するものである。報告書では、古墓群の南端に位置していることから、墓域の結界を示す施設の可能性が指摘されている。

建物跡は、古墓群・方形基壇・経塚の位置する尾根の西側下方に造成された2段のテラス上で検出されている。B地区と呼ばれる上段のテラスは東西約16m、南北約10mで、地山を削平して造成している。A地区と呼ばれる下段のテラスは尾根側にあたる南東部を削平し、北西部に盛土して造成している。尾根との比高差は上段のテラスで約3m、下段のテラスで約4mである。上段のテラスで検出された掘立柱建物跡は東西4間、南北3間(8.1m×6.3m)のSB01と東西3間、南北3間(7.2m×5.6m)のSB02の2棟である。両者の先後関係は明らかでないが、1棟の建物が1回の建て替えを経たものとみることができよう。下段のテラスでも、東西4間、南北4間のSB03(8.5m×8.5m)と同じく東西4間、南北4間のSB04の2棟の掘立柱建物跡が検出され、B地区同様、1棟の建物が1回の建て替えを経たものとみることが出来る。A地区からは古瀬戸瓶の破片が出土しており、この建物内で使用されていたものの可能性がある。

宮墳墓群は福知山市大字宮小字城ノ尾に所在する。墳墓群は南東から北西に向かって傾斜する斜面に位置し、直径5～7mの低平なマウンドを持つ3基からなる。1号墓は墳頂部に2基の隅丸長方形プランの土坑(土葬施設)が平行して設けられている。これらの土坑底面には一短側辺に接して土坑底よりさらに1段掘り下げたピット状の部分がある。この部分には経巻等が納められていた可能性が考えられている。1号墓の裾部には火葬骨を出土する石組遺構が検出されている。2号墓はマウンドのほぼ全面で円礫が認められるが、

一部では列状や方形状に配列されることが注意される。礫の間からは火葬骨が少量出土している。また墳頂中央部やや北寄りには丹波焼大甕の下半部が埋められており、大甕は火葬骨で満たされていた。この遺構は単に蔵骨器を持つ墓として報告されているが、数基の火葬墓と、大道廃寺でみたような納骨遺構なのではないかと考えられる。3号墓は墳頂部に隅丸長方形プランの土坑(土葬施設)1基をもつ。これらの墳墓群は13世紀前半～14世紀後半にかけて、3号墓、1号墓、2号墓の順に築かれたと考えられている。

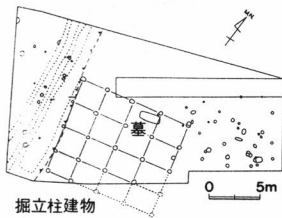
建物跡は墳墓群からさらに北西方向に斜面を下ったところに造成されたテラス上に位置している。墳墓群との比高差は約3mである。テラスの大きさは東西約12m・南北約15mで、斜面高位の東側を削り、西側に盛土して造成されている。建物は自然石を用いた礎石建物で東西4間(9.4m)・南北3間(7.1m)を測る。この建物の時期は、明らかでないが、墳墓群の時期に重なるものと考えられている。

日光寺遺跡⁵は熊野郡久美浜町大字浦明小字日光寺に所在する。調査対象地より南東の山腹と海岸段丘との傾斜変換点付近に板碑が散乱しているところがあり、墓地はこの場所に位置していたと思われる。建物跡は墓地の北西部にある平坦地に建てられている。この平坦地は北に向かって開く小さな谷状地形を埋め立てて造成したものである。建物は東西4間(11.2m)・南北4間(9.4m)の総柱の掘立柱建物跡である。柱の抜き取り穴から青白磁小壺の破片が出土していることから、12世紀末頃の建物と思われる。青白磁小壺は一般の集落遺跡からはほとんど出土することがなく、この建物は日常の生活の場ではない建物と考えられる。掘立柱建物跡の北辺東寄りに、龍泉窯系青磁碗と短刀を副葬した土葬墓(木棺墓か?)が1基検出されている。この墓と掘立柱建物跡の時期は近接しており、両者が同時に存在した可能性も考えられる。同時に存在していた場合には堂下に遺体を安置する実例となろうが、土葬墓の位置が建物の北辺東寄りに位置していることなどから、土葬墓の方が後出するものと考えている。

ところで、ここに挙げた3遺跡の建物には共通した点のあることに気づく。まず第1は、いずれの建物も方位を意識して建てられていることである。しかも、



第2図 宮墳墓群平面図



第3図 日光寺遺跡平面図

建物の東西方向と南北方向の長さを比べると、東西方向の方が長い傾向があり、南北方向の長さの東西方向に対する比率は0.8前後を測る。第2は、建物と墓地との位置関係が似通っていることである。大道廃寺では墓地の南西下方に、宮遺跡と日光寺遺跡では墓地の北西下方に位置している。墓地の西側の下方に建物を建てるという意識が働いているようである。このことは、3遺跡の建物が建てられて

いた平坦地すべてがその建物を建てるために造成されたものであることからもうかがうことができる。このような共通点の見出せる3遺跡の建物は、その性格についても共通するものがあると考えられるであろう。

3 墳墓と堂

墳墓に伴って建物を建てることは、天皇陵の場合には平安時代前期からみられる。平安時代の葬送史を詳述した福山敏男氏の「中尊寺金色堂の性格」によると、仁明天皇は嘉祥3(850)年に崩御し深草陵に葬られたが、子の文徳天皇は陵の側に嘉祥寺を創建し、翌年には仁明天皇の使用した清涼殿を移築して嘉祥寺の堂としたという。また、関白藤原道隆の妻高階貴子は長徳2(996)年に没したが、翌年、子の伊周・隆家が母の墓に参り、そこに堂を建てることを発願したとされており、10世紀には墳墓の側に堂を建てるのが藤原氏でも行われていたことがわかる。さらに、寛弘2(1008)年には、藤原道長が宇治の木幡に浄妙寺を創建し、まず三昧堂を建てたとされる。宇治木幡の墓地は藤原基経が9世紀後半に点定した藤原氏の墓所で、基経以降の墳墓が累々と築かれているところであり、その後も藤原氏一族が葬られている。これらの墳墓のある山裾に一族の供養を行うための堂を建てたのである。この変化には、単に個人の墳墓に対する供養を行うための堂から、一族の墳墓全体に対する供養のための堂への変化にとどまらない意味が認められる。一族の墳墓の側に建てられた堂は、死後、やはりこの地に葬られるであろう一族の生者にとっては、一族の死者に対する追善供養と同時に、生前における自らの為の逆修供養の場であったと考えられるのである。⁷

大道廃寺の掘立柱建物、宮墳墓群の礎石建物の立地は、浄妙寺に類似している。大道廃寺の建物について、藤澤典彦氏は、堂内納骨を行う墳墓堂もしくは阿弥陀堂・法華堂等の堂であると指摘しているが、堂内はともかく、堂下に遺骨を納めた痕跡は発掘調査では認められない。大道廃寺においては、前述のとおり、14世紀中葉には総供養塔＝納骨塔としての方形基壇が成立している。総供養塔としての性格を持つ紀年銘の石塔には、14世紀前

葉～中葉のものが多く⁹、この時期に総供養塔が盛んに造られたことを示している。堂内納骨には、応徳2(1085)年から天養元(1144)年にかけて、4人の中宮や内親王の遺骨をつぎつぎに納めた醍醐寺円光院の例があり、遺体を火葬せずに納めたものとしては中尊寺金色堂などの例がある¹⁰。いずれも堂内に合葬するもので、納骨塔と共通する性格を有するものといえるだろう。大道廃寺の建物が藤澤氏の言うような堂内納骨を行うための堂であるとなれば、方形基壇成立以前の納骨がこれらの堂内に行われていたものであろうか。いずれにしても、これらの建物は、その墓地を墓所としていた一族の供養を行うための堂であるとみて大過ない。そこでは、追善とともに逆修の供養が行われたものと考えられる。墳墓群に先行する経塚も、逆修の為の納経という位置付けが可能ではないだろうか。宮墳墓群では礎石建物を堂、2号墓の蔵骨器とされたものを納骨塔と見ることができる。日光寺遺跡の掘立柱建物についても、墓地が調査地外であるため墓地の成立が掘立柱建物の時期まで遡るかどうか定かでないとはいえ、先に見た大道廃寺、宮遺跡の建物との類似性からも同様の性格を持った建物の可能性が指摘できる。大道廃寺・宮墳墓群の建物は時期の決定ができないが、墳墓群の年代から考えて13世紀～14世紀のものと考えられる。日光寺遺跡の建物は12世紀末頃のものである。このころには、丹波・丹後地域でも有力な階層では平安貴族と同様な葬送・追善・逆修の習俗が行われていたことがうかがわれるのである。

4 おわりに

中世墓地を理解する試みとしては、京都府北部においても、筒形容器を出土する遺跡を中心に、経塚としての性格と墳墓としての性格との複合の可能性を指摘する研究が行われている¹¹。中世の葬制、墓制、供養の習俗などを解明するためには、こうした特定の遺物・遺構の研究を積み重ね、その成果を総合することにより、中世墓地全体の構造を明らかにすることが必要であろう。小稿で、調査着手前の表面観察によっても目につきやすいマウンド、石組、石塔等に比べ、これまで注目されることの少なかった建物跡を中心に中世墓地の再検討を試みたのも、墳墓単体としてではなく、さまざまな遺構の複合体としての墓地を理解するためのひとつのアプローチになるのではないかと考えたからである。

こうした目で、たとえば丹波地域の中世墳墓等の調査を概観すると、これらの他にも中世墳墓に伴う可能性を考えうる建物跡を見出すことができる。福知山市のヌクモ古墳群¹²では1号墳、2号墳のそれぞれの墳頂部で掘立柱建物跡が各1棟検出されている。これらはいずれも東西3間、南北2間の建物で、東西方向が長く、方位を意識しているのではないかと考えられる。また、高所に位置する1号墳上では、建物と重なる位置で土坑が検出されている。中世墳墓に関連する遺物はいっさい発見されていないが、古墳上やその周囲

に中世墓がしばしば営まれることは改めて指摘するまでもないことであり、小屋ヶ谷古墳の墳丘上に営まれた後正寺古墳¹³の南東にある狭い平坦地でも掘立柱建物跡が検出されている。山稜上や山腹で検出される建物跡は中世城館に関連する遺構とされることが多いが、これらが中世墳墓に関連する遺構である可能性も検討してみる必要があるのではないだろうか。とは言うものの、建物の詳細な時期や、その建物がどちらを正面として建てられていたのかなど、不明なことが多い。これらは、考古学的調査によって解明していかなければならない事柄である。小稿が今後の中世墳墓、あるいはそれと重なることの多い古墳の調査においても、こうした建物の存在や、その性格に注意を払うきっかけとなれば幸いである。

(もりしま・やすお=当センター)

- 1 当時京都府内で行われた中世墳墓の調査のうち主なものは、次に挙げるとおりである。
1979～82年 福知山市宮墳墓群
1981年 福知山市大内城墳墓
1981年 福知山市大道廃寺
1981～82年 久美浜町権現山遺跡
1981～82年 加茂町前門墳墓群
1982年 福知山市山田古墓
- 2 竹原一彦「大道廃寺跡の調査」(『京都府遺跡調査報告書』第1冊 豊富谷丘陵遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 3 藤澤典彦「中世墓地ノート」(『佛教芸術』182号 毎日新聞社) 1989
- 4 辻本和美「宮墳墓群」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 5 森島康雄「国道178号バイパス関係遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 6 福山敏男「中尊寺金色堂の性格」(『寺院建築の研究』下) 1983
- 7 三浦圭一「中世人の現世・他界観」(『日本の社会史』第7巻 社会観と世界像 岩波書店 1987)には、逆修供養が平安時代末期に都市貴族の間で行なわれはじめたと述べられている。
- 8 3に同じ。
- 9 3文献に大和周辺の紀年銘の五輪塔が挙げられている。
- 10 6に同じ。
- 11 杉原和雄「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について—」(『考古学雑誌』第74巻第4号) 1989
- 12 竹原一彦「スクモ古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 13 伊野近富「小屋ヶ谷古墳(付 後正寺古墳)」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988